

# The Light Has Gone

さくら じゅん  
佐倉 潤

ガシヤアアアン

有明の月の心もとない光が包むこの屋敷に一際大きな破壊音が響き渡り、寝室の大きな窓ガラスが割れた。キングサイズのベッドに一人の少女が寝ていたが、大きな音にゆっくり目を覚ます。

ベッドの上でうつ伏せになっている彼女はバレンティン・モルスオプターティオ・テスタロッサブラッドリー。金色の綺麗な髪を背中まで伸ばし、それが黒のネグリジェと見事なコントラストとなっている。その黒のネグリジェからは白くて長い手足が伸びている。椅子に座ってジッとしていたら西洋人形と間違えそうな、そんな天国的な美しさがあった。

しかしその実態は天使とは程遠い存在だが。

バレンティンがゆっくり起き上がると、そこにはこの屋

敷のメイドが倒れている。

すぐに起き上がりバレンティンの方に目を向ける。

「まだ寝ていたのですか、お嬢様。もう起きる時間ですよ。こんな状況だというのは、メイドはバレンティンに説教をする。」

今は夜中の十一時。普通なら寝る時間だが、バレンティンにとっては今からが一日の始まり。いつもならメイドに起こしてもらって寝起きの紅茶を楽しむのだが、今日はそれが無い。

「あなたが起こしてくれないからじゃない、フィリア」  
「今、起こしに来ましたわ。お嬢様、おはようございます」

そんな減らず口のような事を言いながら、メイドのフィリアは持っていた対装甲用ライフル銃のマガジンを確認し、そしてそれを投げ捨てた。もう残弾が無かったのだろうか。他にも背中や腰に数多くの武器を持っている。ほとんどが小さい女の子では扱えないような代物だが、フィリアはそれらも容易く扱う。しかし今日の相手にはこれらも通用しないと悟ったフィリアは、それらを下ろして自身の軽量化を図る。

でもズレて外れそうになっていた頭のホワイトプリムはしっかりと着け直し、黒いロングスカートとエプロンに